

[巻頭インタビュー]

撮影：齋藤正

“大漢和”という

検算

身体性による『論語』解凍の試み

能楽師
安田登

紀元前五世紀に成立したとされる『論語』と、奈良・平安までそのルーツをさかのぼる能。

その二つの世界を軽やかに行き来し

圧縮された古の感覚に息吹を込める。

そんな異能の能楽師・安田登が語る、

『大漢和辞典』だけが持つ

特別な魅力と機能とは……。

つまらないのに長く残っている

そこには何か意味があるに違いない

『論語』と能には、じつは二つの共通点があります。ひとつはすごく古くからあるということ。そして、もうひとつは、普通に考えるとどちらもつまらないということ（笑）。でも、つまらないものがこれほど長く続いているからには、そこには絶対何か意味があるに違いないんです。

能については、自分の仕事でもあるので、その理由は早くから気づいていたのですが、『論語』についてはよく分からなかった。分からなかったので、だったらもう一度読み直してみようと思い、さらにどうせなら自分で書いてみようと思ったんです、しかも孔子時代の文字（金文）で。

すると面白いことに気づいたんです。『論語』の中には孔子の時代にはまだない文字がたくさん使われているんです。ということとは、元々の『論語』は我々が現在読んでいる形の『論語』とは別物だったという可能性もあるのではないかと。だとすれば、元々書かれていた文字の形まで遡って読まない面白さが分かるはずがない。つまり、『論語』が面白いかつまらないかは、読み方ひとつで変わるのです。



漢和辞典の三つの流れと そのすべてを支える『大漢和辞典』

『論語』の読み方について語るには辞書の話は避けて通れませんが、じつは私は漢和辞典の仕事に携わっていたことがあるんです。二十代の前半頃かな。熟語の執筆を担当しました。大学にはあまり真面目に行っていなかったんですが、古代中国哲学を専攻するゼミだけは参加しており、卒業するときに先生から「漢和辞典を作るからちょっと手伝え」と言われました。

そのときははつくづく編集者って大変だなあって思いましたよ。『康熙字典』をはじめ

めとした、ありとあらゆる辞書に載っている熟語をコピーして、それを貼り付けて一覧にする。そうした作業を全部やってくれるわけですから。そのなかからどの熟語を載せるかを取捨選択して、その意味をまとめてひたすら書くのが私の役目でした。

そうした一連の作業を一度体験してみるとよく分かるんですけど、あらゆる漢和辞典というのは、ひとつの系統図のなかに位置づけられるんですよ。親となる辞書があって、その子にあたる辞書があるといった具合に。辞書の項目を書くという作業は、その系統図をまず自分で作ってみて、自分ほどの辞書の系列に則^{したが}らうかというのを決

め、それにオリジナリティを付け加えていくという流れになるわけです。ですから相当たくさん辞書を見ましたよ。極端に言えば、その当時出ていた漢和辞典はすべて見たと言ってもいいくらい。

その結果、たとえば字源について見ると漢和辞典には大きく三つの流れがあるということが分かります。赤塚先生（*赤塚忠／『新字源』編者）系のもと藤堂先生（*藤堂明保／『学研漢和大事典』編者）系のもの、そして白川先生（*白川静／『字統』編者）系の三つの流れですね。赤塚先生の記述は字形が詳しく、藤堂先生のは音韻がすごく詳しい。また、解釈という観点

から比較すれば、正統派の赤塚先生に対して、ぶっ飛んでいるのが白川先生。白川先生の解釈はとてもユニークで、すごくインスピレーションをもらえるんですけど、うかつに信じちゃいけない部分もあったり(笑)。ですから同じ字源について考えたら、最低限この三つを見比べてみる必要があるんです。

ではいったい、『大漢和辞典』というのはどの流れに属しているのでしょうか。これはまあ当たり前なんですけど、どの流れにも入らないんですね。というよりも『大漢和』は、この三つの系統の上に位置しているというか、あるいは下に位置していると言った方がいいのか……、どちらにしても、これらすべての辞書の源流となる存在が『大漢和辞典』なんですよ。

『大漢和』以外にはあり得ない
絶妙なフラット感と切り取りの妙

なぜ『大漢和』がすべての漢和辞典の源流たり得るのかといえば、それはすでに多

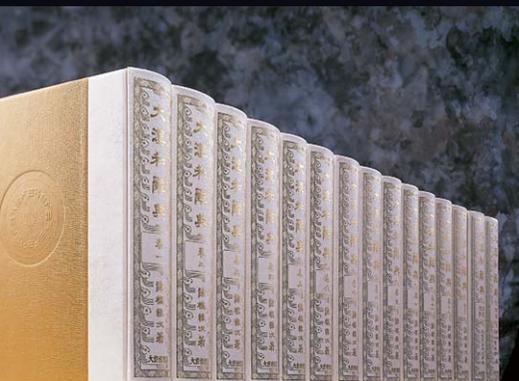
すべての漢和辞典の源流 それが『大漢和辞典』なのです

くの方が言っておられますが、収載されている用例が素晴らしいからなんです。もちろん量だけでなく質に關してもです。『大漢和』は、原典を徹底的に調べ上げたマニアックな用例まで載せていながらも、全体として膨大な量の用例を引いていることで、結果的にフラットなバランスを保っている。このことがとても重要な意味を持っているんです。圧倒的な収録語数と、全体としてのフラットさがあるからこそ、あらゆる漢和辞典の編者が安心して『大漢和』を参考にすることができると言えるなら、質量ともに絶対的な信頼感があるということですよ。

さらに付け加えれば、切り取り方の妙でしょう。たとえば、日本人にとっては「うみ」つてもともと「みずうみ」も「しおうみ」も同じ「うみ」だったわけです。それが後の時代になってから「湖」「海」という風に分けられていくわけですが、諸橋先生の場合は、こうした「分ける」作業がマニアックなまでに細かいんですよ。それはもう、「ここまで分けるか！」っていうくらい(笑)。

これは、口でいうと簡単そうですが、どの編者にでもできることではありません。やはり、あれだけたくさんさんの用例を集めきった諸橋先生だからこそなせる業なんです。逆に言えば、諸橋先生の場合は、個々の用例から読み取れるイメージやニュアンスの微妙な違いが分かかってしまうだけに、細かく分けていかないと気持ち悪かったのかも知れません。

「精緻さ」を感じさせる反面、すごく遊んでいるイメージもある諸橋先生の切り口。それは、刀を振り回してバサバサと言葉を切って楽しんでいるような印象すら受けるんです。そうした切り口を見せてもらうことは私にとって非常な楽しみですし、各辞書の編者たちもすごく刺激をうけることになったと思います。



広く漢字文化圏を俯瞰するための必須資料として国内外を問わず圧倒的な評価を受け続けている『大漢和辞典』(諸橋轍次著/全15巻/小社刊)。

「身体性」で漢文を読むとは
いったいどういうことなのか？

そろそろ本題の「身体性」の話に入りませんが、「子曰學而時習之、不亦説乎」（子曰く、學「学」んで時にこれを習ふ、また説「悦」ばしからずや）」という「論語」の冒頭の有名な一節を見てみましょう。

じつはここに出てくる文字のほとんどは、身体に関わる要素が含まれているんですね。私はそれらの要素を「身体文字」と呼んでいます。「子」は文字通り子どもを指しますが、「習」は口と舌。「学」には両手を動かす様子と子どもが含まれていますし、「而」はヒゲあるいは髪の毛などと言われています。「時」には手が入り、「習」には鳥の羽が。「之」は足で、「亦」は立っている人。「悦」は体から魂が出ていっている人の形といった具合に、じつに身体文字ばかりなのです。そう思って読み返すと、この文章は非常にプリミティブな要素を多く含んでいることが分かりますし、おそらくこれが書かれた当時の人は、身体の一部を強く感じながら読んだと推測されます。

こういった個々の漢字に含まれる身体的な要素を元にして、リアルな想像力を働かせていくと、漢文の解釈の幅はぐっと広がっていきそうですね。それが「身体性」で漢

文を読むということなのです。

それでは実際に「身体性」をもって冒頭の一節を読むとどうなるのか。

「学」という文字は両手を使って子弟に礼楽や舞を教えているさまで、すし、「習」は両手を羽のように広げて自由に舞うイメージになります。そして、「悦」という文字は巫女の体から外に何かが出て行くさまを表しますが、憑依されて一体化したり、あるいは脱魂して霊界を遊行しているような、ある種、呪術的ともいえるよろこびの感覚です。つまり、この『論語』の一節は、現在の私たちのイメージとはほど遠く、もっと呪術的で、そしてもっと躍動感溢れる文章として読まれるべきものなのです。

これは「身体性」のひとつの側面に過ぎませんが、こうした感覚を意識せずに読むと、『論語』の意味は全然変わってしまうし、まったく面白くなってしまいます。このまま現代の感覚で受け取って読んでしまうと、「机に座って勉強して時々復習するのが悦楽だ」ということになっちゃうので

圧縮された古の人々の感覚 その解凍の鍵を握る『大漢和』



昨夏に出版された『からだで作る 芸の思想 武術と能の対話』（安田登、前田英樹共著／小社刊）

しよ（笑）。能もそうですが、昔の人々の圧縮された思いや感覚を、解凍、するためには、表面的な意味を現在の感覚でなぞるだけでは不十分で、私の場合はそこに「身体性」という要素を加味しているのです。

『大漢和』しか持ち得ない 新たな解釈のための検算機能

能の世界では最低、十年間は師匠の言うことにまったく疑いを持つてはいけないんです。ところが、いつまで経っても師匠と同じ芸風から抜け出せないこともまた、無主風といって嫌われるんですね。芸に主体性がないと。同じようなことが漢文にも言

えて、歴史的に積み重なってきた解釈から自由になるためには、一度、辞書から離れてみる必要があるのだと思います。辞書という師匠から距離を取り、辞書に記述されている意味の、さらに奥に分け入っているという試みることで、はじめて自分なりに漢文を解凍することができるのです。

もちろん最初から辞書を疑うなんて論外ですよ。辞書から教わるのがすべてのベース。目をつむっても見たいページがパッと開けるくらい辞書にどっぷり浸かってからでない、辞書を疑う資格なんてありません。実際、私のような読み方は専門家の方からいわせると邪道かも知れませんが、

しかし発想のヒントはすべて辞書から得ていて、その安心感があるからこそ、自由に想像の翼を広げることができるのです。

つまりですね、私なりの解釈といってもそれは辞書との間に「身体性」という距離感をもって読んでいるだけのこととして、そういった距離感をきちんと保つためには、やはり『大漢和辞典』という辞書が不可欠なのです。この解釈は他の用例に当てはめても通じるのかどうか、あるいは音韻という観点でも矛盾がないか。そうした検証作業はすべて最終的に『大漢和』に行き着かざるを得ません。そう、『大漢和』による検算しか方法がないのです。

もちろん検算の結果、自分の解釈が間違っていることも、残念ながら多々あります(笑)。それと、『大漢和』の用例にはきちんと出典が出ているので、春秋時代の用例には当てはまるけど、戦国時代の用例になると説明がつかない、といった新たな発見をすることもあります。また、『大漢和』の用例の原文に当たるとも楽しみですし、新たな古典を知る機会にもなります。

いづれにしても、漢文が書かれた当時のリアリティを正しく感じ取り、味わうためには、手間暇をかけて解凍する必要があり、その試行錯誤には『大漢和辞典』という存在が絶対に欠かせないのです。

安田登 (やすだ のぼる)

一九五六年、千葉県生まれ。下掛五生流ワキ方能楽師。ワキ方の重鎮・鍋本岑男師に二十代後半で入門。東京を中心に能の舞台を動めるほか、異分野とのコラボレーションにも活発に取り組む。かわら、東京・広尾の東江寺にて「寺子屋」と称する私塾も主催している。「からだで作る(芸)の思想 武術と能の対話」(共著・大修館書店)、『あわいの力「心の時代」の次を生きる」(ミヤマ社)など著書多数。

